

FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 高龍秀

所属/職名：経済学部 教授 学部長

参加セミナー名： 神戸大学 FD 講演会 溝上慎一教授「今なぜアクティブ・ラーニングか」

セミナー参加日時/場所： 【日時】 2015 年 3 月 5 日(木)13:00~14:50

【場所】 神戸大学瀧川記念学術交流会館 2F

■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

事前に、経済学部教員から、2014 年 6 月に発行された、京都大学・高等教育研究開発推進センターと河合塾による『学校と社会をつなぐ調査』、および、同年 9 月 26 日に東京会場で行われた分析結果報告会のレジュメを頂戴していた。当日のレジュメは 9 月 26 日のレジュメとほとんど同じであったが、溝上氏の話をもとに初めて直接聞き、大いに刺激になった。以下、講演の内容を甲南大学（経済学部）の現状とも関連させ記述する。

1. アクティブ・ラーニング導入の必要性

- ・高校までは、「言語活動」を身につける学びが十分できていない。しかし社会に出ると他者と言葉を介して考えを伝え、他者の言葉を聞き理解することが必須。進学高校でも受験のための小論文対策くらいはするが、すでによく知っている人以外の人（他者）との言語活動の経験を積ませることが必要。
- ・京大でも、みんなと作業をすることが苦手な学生が多い。就職活動の面接でもマシンガントークのように相手の話を聞かずに一方的に話すとか、対話にならない問題がある。
- ・学校から社会へのトランジションにおいて、必要な言語活動能力を大学でつけるべき。

2. 講義の中でこそ、アクティブ・ラーニングを導入すべき

- ・日本では一方通行の講義と演習をきっちり分けているが、欧米では講義の中で演習的要素・ディスカッションを入れるケースが多い。
- ・米国では、100 人くらいの講義でも TA が多く付き、講義の後に、1 クラス 15 人程度の演習クラスを TA が担当し活発なディスカッションを行っている。
- ・メルボルンでは、週に 2 コマ講義があり、3 コマ目は教授が演習クラスを担当している。講義の中でこそアクティブ・ラーニングを導入すべき。

⇒甲南大学経済学部では、入門ミクロ経済学とマクロ経済学が、週 1 コマ講義+1 コマ演習という形態で、上記の形態に近い。この演習クラスの効果を高めることと、他の授業でもこのような形態を拡大することが可能か検討すべきかもしれない。

- ・盛岡三高でのアクティブ・ラーニングの授業を動画で紹介。大変刺激的だった。

1年の世界史Aで、先生が10分講義した後に、まとめ問題を出し、その答えを分かりやすくペアワークで他者に伝える課題を出す。いきなりペアで相手に伝えるのは難しいので、最初の20秒で、自分の意見をメモする。次の20秒で口頭で他人に伝えることの練習として、自分でブツブツ話す。その後、相手の顔を見て課題に対する自分の考えを伝える。

- ・このペアワークの課題を1回の授業で4回くらい実施。
- ⇒「言葉を通じて相手に自分の考えを正しく伝える経験」「他者と一緒に作業する経験」を繰り返すことになる。
- ・山梨大学工学部での反転授業の例：NHKで放送され、ユーチューブでも出ているもの。ネットで事前学習をした上で、授業時には最初からグループごとに座り、今日の講義のポイントと分からなかったことを話し合い。後に、グループの1人がマイクでそれを発言する。
 - ・溝上氏は180人くらいの講義でアクティブ・ラーニングを導入している。
いきなりアクティブ・ラーニングをさせることは難しいので、最初はウォーミングアップ（3人グループで今日何時に起きて昼ごはん何食べたか話合わせる。他者と話す練習）
 - ・その次は授業で習ったことを基にした課題をグループで考えさせる。
 - ・90分授業の中で、講義7、アクティブ・ラーニング3、または8：2の程度でアクティブ・ラーニングを実施。
 - ・グループ内の他者にしっかり自分の意見を言う体験。他者の意見をうまく聞く態度も重要と伝える。
 - ・最後の時間に今日学んだことをコメントシートに書かせ提出させる。
必要に応じてだめ出しをすることも重要。
 - ・それぞれの大学のレベルに応じて、学生がアクティブ・ラーニングに盛り上がるツボがある。
 - ・講演会の後に司会の神戸大学教育推進機構の教員から、神戸大学は2015年度から抜本的な教育改革を行い、アクティブ・ラーニングを積極的に導入する方針などを聞いた。

FD 学外セミナー参加報告書

氏名： 鳩貝 耕一

所属/職名： 情報教育研究センター 教授

参加セミナー名： 神戸大学 FD 講演会「今なぜアクティブ・ラーニングか アクティブ・ラーニングを通して何をを目指すのか」

セミナー参加日時/場所： 2015年3月5日 13:00～14:50、神戸大学 理学研究科 Z棟 201・202号室

■セミナー内容・所感・授業や本学への活用について

アクティブ・ラーニング研究の第一人者である、京都大学の溝上慎一教授によるご講演である。

アクティブ・ラーニングそれ自体を無条件に「良し」とする風潮があるが、教育を改善するための万能の「魔法の杖」ではないことも事実である。多くの大学教員が従来スタイルの教育でも問題なしと主張する中、そもそも「アクティブ・ラーニング」とは何か、それにはどのような種類があるのか、どのような教育目的をもって行われるものか、どのような環境において効果を発揮するのか、弊害などが存在するのか等、アクティブ・ラーニングについての基本的な理解をしっかりと固めることがこの講演会の目的である。

明治時代以降の近現代社会では、ライフコース（学校教育から社会人生までの道程）がどんどん個人化に向かい、1990年代をすぎると社会主義よりも個人主義のほうが尊重されるようになってきた。戦前の日本では、社会が個人に影響をおよぼしたが、近年は個人の行動が環境に影響をおよぼし、その結果社会が形成されていくようになった。

このような社会において、近しい友人との親密なコミュニケーションはできても、公共の場での一般人とのコミュニケーションが不得意あるいはできない生徒や学生が増えてきているのも事実である。

このような若者が社会人として活躍できるよう、教育学習手法を能動的（アクティブ）なものに転換し、大学の4年間で学びの転換を図る必要があるというのが氏の主張である。

講演の中では、様々な事例を紹介しながら、日本の大学が行っている「講義」と「演習」というスタイルは、世界的にみて特異であるということ、特にアメリカやオーストラリアなどでは講義時間の中の一環としてアクティブ・ラーニングのステージが導入されていることなどが紹介された。日本の高等教育は、深刻なレベルで世界から遅れているとのことである。